

国語〔前期A方式(1/29)〕

設問		解答例	
一	問一	①	2
		②	2
		③	4
		④	1
		⑤	5
		⑥	5
	問二	⑦	5
		⑧	2
		⑨	1
		⑩	6
		⑪	3
	問三	⑫	4
		⑬	2
		⑭	2
		⑮	3
		⑯	5
問四	⑰	4	
	⑱	1	
問五	⑲	4	
問六	⑳	3	
問七	㉑	1	
問八	㉒	4	
二	問一	㉓	5
		㉔	1
		㉕	4
		㉖	1
		㉗	1
		㉘	3
	問二	㉙	3
	問三	㉚	8
		㉛	1
		㉜	7
	問四	㉝	7
		㉞	4
	問五	㉟	2
		㊱	3
	問六	㊲	2
		㊳	1
問七	㊴	4	
	㊵	5	
問八	㊶	3	
問八	㊷	3	

国語〔前期A方式(1/30)〕

設問		解答例	
一	問一	①	4
		②	5
		③	2
		④	1
		⑤	4
		⑥	3
	問二	⑦	4
		⑧	1
	問三	⑨	2
		⑩	4
		⑪	5
		⑫	1
		⑬	4
	問四	⑭	3
		⑮	6
		⑯	4
⑰		1	
問五	⑱	2	
	⑲	5	
	⑳	3	
問六	㉑	4	
問七	㉒	2	
問八	㉓	5	
二	問一	㉔	3
		㉕	1
		㉖	2
		㉗	1
		㉘	5
		㉙	2
	問二	㉚	2
	問三	㉛	3
	問四	㉜	5
		㉝	2
問五	㉞	1	
問五	㉟	2	
問六	㊱	5	
問七	㊲	3	
問八	㊳	2	
	㊴	3	

国語〔前期B方式(1/31)〕

設問		解答例		
I	問一	①	4	
		②	3	
		③	5	
		④	2	
		⑤	5	
		⑥	2	
	問二	⑦	4	
		⑧	1	
		⑨	6	
		⑩	2	
		⑪	3	
	問三	⑫	2	
		⑬	3	
		⑭	1	
		⑮	5	
	問四	⑯	1	
⑰		5		
⑱		1		
問五	⑲	4		
問六	㉑	5		
問七	㉒	5		
問八	㉓	2		
II	(I)	問一	㉔	4
			㉕	3
			㉖	2
			㉗	4
			㉘	3
	(I)	問二	㉙	5
			㉚	1
			㉛	3
		問三	㉜	4
			㉝	5
			㉞	1
			㉟	4
	(II)	問四	㊱	4
		問五	㊲	3
		問六	㊳	4
問七		㊴	2	
㊵		2		
㊶	1			
㊷	3			
㊸	4			
㊹	2			
㊺	4			

設問		解答例	
III	問一	㉛	3
		㉜	1
		㉝	5
		㉞	5
	問二	㉟	3
	問三	㊱	1
	問四	㊲	5
		㊳	5
		㊴	4
	問五	㊵	2
		㊶	2
問六	㊷	1	
問七	㊸	4	
	㊹	3	
問八	㊺	2	
	㊻	1	
問九	㊼	1	
問十	㊽	5	
問十一	㊾	3	
	㊿	5	

国語〔後期(3/8)〕

設問		解答例
一	問一	① 2
		② 4
		③ 3
		④ 3
		⑤ 5
	問二	⑥ 4
		⑦ 3
	問三	⑧ 3
		⑨ 5
		⑩ 2
		⑪ 1
		⑫ 4
	問四	⑬ 2
		⑭ 5
		⑮ 3
	問五	⑯ 1
		⑰ 2
		⑱ 3
		⑲ 4
		⑳ 3
	問六	㉑ 2
	問七	㉒ 5
	問八	㉓ 4
二	問一	㉔ 5
		㉕ 2
		㉖ 4
		㉗ 6
	問二	㉘ 2
		㉙ 3
		㉚ 1
	問三	㉛ 3
	問四	㉜ 1
		㉝ 1
		㉞ 4
		㉟ 3
		㊱ 4
	問五	㊲ 2
		㊳ 4
		㊴ 3
		㊵ 1
		㊶ 2
	問六	㊷ 5
	問七	㊸ 3
	問八	㊹ 3
問九	㊺ 4	



らは決してひとつのかたちで固定されてはいない。彼らの心や視点は——あなたや僕と同じ生身の人間として——微妙にぶれていくし、それにつれて彼らのしゃべり方も少しずつ変化していく」に合致する。選択肢④は「古風な言い回しや時代的な装飾は、本来に必要なものだけを残し、あとはできる限りお引きとりを願うことにした」に合致する。選択肢⑤は「原文においても理解されにくい」が、本文の「英語で一行一行丁寧に読んでいかないことにはその素晴らしいところが十全に理解できない」「彼が何を言いたいのか、それが読者には読書という流れの中で何の不都合もなく一瞬にして理解できてしまう」に合致しない。よって、選択肢⑤が正解。

問五

傍線部の理由を問う問題。傍線部の前の部分で「愚僧が詠歌は一代にただ一首にて候ふ(私のような者が詠んだ和歌は一生の間にこの一首だけでございます)」として、「今度の撰集を喜びの心(今度の撰集を喜んで)」「喜撰」と称し、「己が詠み置く歌数百に及ぶ中を撰んで、皆その不可を捨てけること(自分が詠んだ歌が数百に及ぶ中を選び、すべてよくないものを捨てたことは)」とあることから、選択肢②「勅撰集編纂を知りこれまで詠んできた多くの自分の詠歌の代表作一首だけを残り、ほかは潔く捨てたから」が正解。

問六 本文の内容の読み取りを問う問題。傍線部の前の部分で、「猿丸は、『元弓削道鏡』であり、『帝位に望みを掛けまくも忝くも時の天子孝謙女帝に密通して(天皇の位に望みを掛け、恐れ多くも時の天皇である孝謙女帝に密通して)』和氣清磨を宇佐八幡宮に遣わし、神勅を偽らせて皇位に就こうとしたが失敗し、孝謙女帝が崩御した後に『下野国』に流され、その際に名前を猿丸大夫に改められたことが書かれている。傍線部は「この猿丸という名前をも記さなかった」の意味で、傍線部の後の文に「朝廷の勅撰を憚る所以なり」とあるので、右の経緯を踏まえて朝廷に遠慮をして、勅撰集の和歌の作者として「猿丸」という名前を記さなかったということがわかる。よって、以上の内容をまとめた選択肢⑤が正解。

問七 本文の内容の読み取りを問う問題。傍線部の前の部分に、「忠岑」の「有明の」の歌は、「上の句のはじめの文字と下の句のはじめの文字の仮名」が「同じ」であり、これは「両頭病」という「歌の病」として禁止された読み方であったが、「忠岑」の歌が素晴らしいことから、「後代には歌の病の禁、少し沙汰しやみ侍る(後の世には和歌の読み方の禁則が少し緩和されました)」とあるので、選択肢③が正解。①は「和歌の実作者の立場から異を唱えて改訂した」が、②は「忠岑が整理しなおして」が、④は「歌病ではない」と忠岑が証明した」が、⑤は「非難された和歌を、名手忠岑がやすやすと添削し修正してみせた」が、それぞれ誤り。

国語(前期B方式 1/31)

I

問五 脱文補充問題。脱文は「生産物」の「使用価値」は「それ自体が有する」ものではなく、「社会内の関係に媒介」されることで存在する、という文脈である。「社会内の関係」について述べられている部分を探すと、④の前で、「私」という個人が「社会・歴史的な関係の網目の産物」であることが述べられている。そこで、脱文を④に入れると、「その関係(≡社会内の関係)が物色された形を「私たち」は「自存の実体と錯視してしまう」という後の文につながる。よって、選択肢④が正解。

問六 傍線部について内容を読み取る問題。①は本文の「現実の発話に現れた言行為は、特定の話者によって発せられた具体音の連続であり、ソシユールはこれをパロールと呼んだ」に合致する。②は「人間の持つ普遍的な言語能力・シンボル化活動を(ランガージュ)」とし、「これをその社会的側面である(ラン

グ)」と「個人的側面である(パロール)」に「分けた」という本文の内容に合致する。③は本文の「言語学が人間の(文化化された自然)の根柢にある分節言語を探ろうとする営為である限り、その対象はランガージュであるべきだが、研究者はラングを通してしかその本質には迫れない」に合致する。④は「ラングは超個人的抽象的条件」「一つの社会制度」であり、「社会成員の暗黙の契約のとききものにもとづいている」とする本文の内容に合致する。⑤は、「具体音の選択に際して、(ラング)は関与していない」が、本文の「ラングはパロールの条件であり規則の体系」に、合致しない。よって、選択肢⑤が正解。

問七 傍線部の理由を読み取る問題。傍線部の前の「これ」は「分節言語≡ランガージュ」が、「間接性、代替性、非現実性」によって人間の一切の文化的営為を可能にしたことを指す。傍線部の後の文に「人間は言葉をもったその瞬間からモノとの疎隔の道をたどりはじめた」「幼時、モノの名を知らなかった頃のあの新鮮なモノとの交流」が「言語習得とともに失われ」「抑圧されると述べられている。つまり、言語を用いることで「事物をありのままに認識でき」なくなったことが「悲惨」だということである。よって、選択肢⑤が正解。

問八 問題文の内容を読み取る問題。「彼の考えた(体系)」においては「個は他の個との共存と全体との関連によって存在する関係態なのである」ということは、「個の特徴」はそれ自体で存在するものではなく、「他の要素との相違や類似など」によって初めて浮かび上がってくるものであるということである。よって、選択肢②が正解。①は「個はあくまでも個」「どのような(体系)にあってもその特徴は一定」が、③は「中心となつて」の唯一無二の個があり、その個との関係によって他の個は特徴づけられる」が、④は「他との関係を有さない独立した個も存在する」が、⑤は「個が(体系)の特徴を決定づける」が、それぞれ誤り。

II

問四 脱文補充問題。脱文では「知識として概念色がそのように見えさせている」例として「緑色の青信号を青だと感じ」たり、「空の虹が七色に見え」たりすることが挙げられている。そこで、「概念色」によって見える色が影響を受けるという文脈を探すと、④の前で「もともと物体色がある場合でさえ、それが概念色の逆投影で上書きされてしまうことがある」と述べられている。よって、選択肢④が正解。

問六 二重傍線部について内容を読み取る問題。概念色から物体色への逆投影とは、「物体色」が「概念色」の影響で「上書きされ」たり、「概念色だけが先にあり、それが物体色として現実化」したりすることであり、これが「普遍的」であるということとは、「概念色の及ぼす力は一般に大きい」ということであるので、選択肢④が正解。①は「物体色とは異なる概念色が確固として存在する」が、②は「物体色の知覚は常に概念色によって制御されている」が、③は「実際には存在しない物体色が日常的に数々生み出されている」が、⑤は「判断不能なものも多く、混乱させられるような事例が一般に多くある」が、それぞれ誤り。

問七 問題文の内容の読み取りを問う問題。②は、ヘッドマウントディスプレイを使った実験で、パーチャルリアリティの「風景映像から部分的に色を抜いても」被験者はそのことに気付かなかった」という本文の内容に合致する。よって、選択肢②が正解。①は「視覚で捉える色と実際の色は同じ」が、③は「無数の色を明確に区別できる」が、④は「全く解明されていない」が、⑤は「人間は七色以上の有彩色を知覚できない」が、それぞれ誤り。

III

問二 傍線部の意味を問う問題。「にくし」は「いやだ。憎らしい」の意味。「つべし」はここでは「きつと」に違いない」の意味。よって、傍線部は「不快なものの一つに数えてもよみに違いない」の意味となり、選択肢③が正解。

問三 傍線部の意味を問う問題。「をさをさ」は下に打消の語をとまない、「あまり。ほとんど。めったに」などの意味。また、「ひぐらしは深山辺のものにやひぐらしは深山の辺りにいるものであろうか」に続く文であることから、「聞こえず」なのは「ひぐらしの声」とあるとわかる。よって、選択肢①が正解。

問六 傍線部の意味を問う問題。「さがなし」は「たちが悪い」の意味。「するものは」の「かは」は反語で、「するものであろうか、いやするものではない」の意味。よって、傍線部は「そのようなたちの悪いことをすべきでない」の意味となり、選択肢①が正解。

問七 傍線部の意味を問う問題。「ものは」の数え立てるほどのもの「の意味。「百匹はもの数たいたしたことでもありません」という意味なので、「百匹くらいは簡単だ」ということになる。よって、選択肢④が正解。

問八 傍線部の内容を問う問題。傍線部の前に「荀爽」の娘と「隠瑜」が結婚し、「夫、こころざし深く、またなきものに思ひけるも、まことにことわり深く見えけり（夫は愛情深く、この上もなく大事な人と思つたのも、まったく道理であると思われた）」が、「かかるほどに、この男、病に思ひてのち、いくほどなくて、遂にはかなくなりぬ（こうしているうちに、夫は病にかかった後に、間もなく亡くなつてしまった）」とある。「娘」の様子は、「あるにもあらぬ心地して、悲しさのあまりにや、命も絶えぬとぞ見えける（生きているのか死んでいるのかわからないような気持ちで、悲しさのあまりにや、命も絶えぬ死んでしまいうちに思われた）」と述べられている。月日が流れても「別れの涙は乾く時無かりけり（別れの涙は乾く時がなかった）」に続いて、「父母、「いかにして、忘るる草の種をとりてしがな」と思へど（父母はどうかして忘れ草の種を取りたいものだと思つたが）」とあるので、この場合の「忘れ草」は「娘」に亡き夫を忘れさせる草であるとわかる。よって、選択肢⑤が正解。

問九 傍線部の意味を問う問題。「をかし」には「こつけいだ。心ひかれる。趣がある。すばらしい」などの意味があるが、傍線部の後に「人びとえたとへず、くつくつとわらひぬ」とあることから、ここでは「こつけいだ」の意味であるとわかる。「ねんず」は「我慢する。こらえる」の意味。よって、傍線部は「おかしくて笑いたくなるのをこらえて」の意味となり、選択肢①が正解。

問六 傍線部の内容を問う問題。傍線部の前に「荀爽」の娘と「隠瑜」が結婚し、「夫、こころざし深く、またなきものに思ひけるも、まことにことわり深く見えけり（夫は愛情深く、この上もなく大事な人と思つたのも、まったく道理であると思われた）」が、「かかるほどに、この男、病に思ひてのち、いくほどなくて、遂にはかなくなりぬ（こうしているうちに、夫は病にかかった後に、間もなく亡くなつてしまった）」とある。「娘」の様子は、「あるにもあらぬ心地して、悲しさのあまりにや、命も絶えぬとぞ見えける（生きているのか死んでいるのかわからないような気持ちで、悲しさのあまりにや、命も絶えぬ死んでしまいうちに思われた）」と述べられている。月日が流れても「別れの涙は乾く時無かりけり（別れの涙は乾く時がなかった）」に続いて、「父母、「いかにして、忘るる草の種をとりてしがな」と思へど（父母はどうかして忘れ草の種を取りたいものだと思つたが）」とあるので、この場合の「忘れ草」は「娘」に亡き夫を忘れさせる草であるとわかる。よって、選択肢⑤が正解。

## 国語〔後期 3/8〕

問六 論の流れを踏まえて一文を補う箇所を問う問題。一文は、「純化・高度化」した教育が必ずしも「人間の幸福」につながるわけではないという趣旨であり、「純化・高度化」した教育に対して疑義を呈している。直後に「問題の第一」として「あまりに純化・高度化した教育論は、子どもという存在、あるいは人間というものの可能性を、あまりに高度に想定しているということ」とある②に入れると、うまくつながる。よって、選択肢②が正解。

問八 傍線部の内容を問う問題。「紅の涙」は「悲しみのあまり流す（血の）涙」の意味。「水茎は筆。筆跡」の意味。「まがふ」は「よく似ていて区別がつかない」の意味。よって、選択肢③「悲しみのために流した涙の跡と文字とが区別できないこと」が正解。

問七 傍線部の内容を問う問題。傍線部の「真の教育」「純化された教育」とは「資質・能力やコンピテンシーが描く教育／学習論であり、具体的には傍線部を含む段落の2つ前の段落の「資質・能力と連動するコンセプトとしての『主体的・対話的で深い学び』」である。また、その内容は次の段落で「子どもが自ら対象に取り組み、他者と協働する、能動的で活動的な新しい授業」として、「具体的には、書く、話す、発表するなど子どもが発信（外化）する活動、他者と協働しつつ自ら問題を発見しまた解決を探るような問題解決学習・探究型学習などが重視され」「そのような一連のプロセスのなかで子どもは、手持ちの知識や技能を用いて他者と協働しながら対象と関わり、その過程で資質・能力を増大させていく」と説明されている。よって、選択肢⑤が正解。①は「個人の人生の成功」、②は「個人が能動的に取り組むよう動機付けをしていくこと」によって、③は「暗記や単調な技能訓練に子ども自身自身が能動的に取り組むよう動機付けをしていくこと」によって、④は「教師や周囲と距離を置いて、独力で問題解決に取り組めるような教育」が、本文にそのような記述はないのでそれぞれ誤り。

問九 本文の内容の読み取りを問う問題。①は、本文に「父母、「いかにして、忘るる草の種をとりてしがな」と思へど」とあるのに合致する。②は、本文に「この男、思ひのほか、年ごろ住みわたりける妻はかなくなりて、嘆き、やうやうおこたるほどに（この男は、思いがけなく、長年連れ添った妻が死んでしまひ、その嘆きが、ようやく快方に向かつていたおりに）」とあるのに合致する。③は、本文に「三年ばかりになりぬれば」「この男、病に思ひてのち、いくほどなくて、遂にはかなくなりぬ（夫は病にかかった後に、間もなく亡くなってしまった）」とあるのに合致する。④は「愛する気持ちが失せてしまった」が本文になく、合致しない。よって、④が正解。⑤は、本文に「昔の男よりも、生まれける父の言葉、おろかに覚ゆることわりに、まげてなまじひに出で立ちつつ、今の男のもとへゆくゆくも、袖のしづく、乾く間も無かりけり（昔の夫よりも、自分を生んでくれた父の言葉は言うまでもなくもろろん大切に思われる道理に、しいてむりをして出かけ、新しい夫のもとへ行きながらも、袖にかかる涙が乾く間もなかった）」とあるのに合致する。

問八 傍線部の内容を問う問題。傍線部の「純化した理想の教育」とは、「個人の人生の成功」と「うまく機能する社会」に必要な人間像・能力観を定義し、それを子どもの発達のプロセスに落とし込み、「そのプロセスをらせん状に通過する過程で、子どもは、本来の学び育つ力を解放され、否むしろ、一つの学び育つ力そのものとなり、自分自身をますます高度化していく、学びの自己運動そのものとなる」ということを理想として描いたものであり、それについて筆者は、「それについて筆者は、「それを教育が夢みてきた、真の教育、教育なるもの理想と呼ぶことに、わたしはじつはそれほど躊躇がない」としながらも、「子どもの学び育つ力を最大限に肯定する資質・能力も、また社会を生きる上で／社会にとって有意義な教育課程も、そんな現実の子どもの生の不確実性に伴走するには、あまりに高度かつ過大である」と述